

あみだ池の阿弥陀様

上郡町野桑

むかし、村の底も見えないぐらい深くてきれいな水の池がありました。池の上手の岩場に小さな石のあみださまがまつってありましたので、だれとなく「あみだ池」と呼ぶようになりました。池のほとりに大きな屋敷があり、その主人や村の人達は、あみだ池のあみださまを大切にまつっていました。そうしたある日、大きな屋敷の主人が、町に家を建てたので引っ越しをすることになり

ました。そこで主人は、「あの、あみだ池の石ぼとけもいっしょにうつそう」と勝手に決めてしまいました。

それを聞いた村人達は、「あの、あみださまはこの村のもんじゃ。」「ぜったいに動かしではあかんど。」と主人につめよりましたが、頑固者の主人は、村人の話を聞こうとせずんでした。とうとう使用人にいいつけて、あみださまを動かすはじめました。使用人があみださまに手をかけて持ち上げようとしたが、なかなか動きそうにありません。「なんと、こまいからして重たいもんじゃろ」「こりや、一人ではどないも無理じゃ」「だれかの手をからにやなあ」といって手伝いをたの

みに行きました。やっとのことずるずるとひきずって町まで運びました。

あみださまのなくなった村ではその年、長い日照りつづきで、あみだ池の水はなくなり、田畑の作物はかれてしまうという大かんばんにみまわれました。こまりはてた村人の中から、「こりや、ばちじゃ。」「あみださまのばちじゃ。」「あみださまを動かしたからじや。」という声の流れははじめました。

町に引っ越していった主人はそんな村の様子も知らずに暮らしていました。

ある日のこと、主人があみださまの前を通ると、「村へ帰りたいたい」「村が大へんだ」という声が聞こえてきました。びっくりした主人

は、おもわずあみださまの方を振り向くと、あみださまは悲しそうな顔をしていました。

そこで主人はさっそく村の様子を見に行かせました。すると、あみださまのことばどおり村は大へんだということでした。（そうか、あみださまをわしの勝手につれてきたから村がこういうことになったんじゃないやろうか）（あみださまを村へおかせししよう）とすぐさま使用人に運ばすことにしました。使用人があみださまを持ち上げようとすると、今度はどうも軽くてまるで綿のようだったので、おもわず後にひっくりかえってしまいました。らくらく村へあみださまを運び前の所へおさめました。すると何日もしないうちに雨が降

り出し、あみだ池には水がいっぱいになり、
作物も生きかえり、村人達は、「あみださま
のおかげじゃ、おかげじゃ。」と口々に喜び
あいました。

